

大阪高体連サッカー部 公 式 記 録	会場責任者	主審サイン
	三宅 愛	石橋 義之

3点差以上の勝利で今大会2位に滑り込めた追手門学院と、リーグ敗退は決まっていたが、何としても追手門のそれを阻止したい大阪学芸のリーグ最終戦。追手門が気持ちのこもった守備で序盤から仕掛け、積極的にボールを奪いに行き中盤で学芸の攻撃の芽を摘むと、シンプルに前線へボールをつなぎ、ハイタLERIAへボールを運ぶ。しかし、決定機を作るがスリッピングラウンド状況に加えて、パスやコントロールの質と精度に欠け、決定機をものにできず。対する学芸は、序盤こそ勢いに押されてリズムに乗りながらも、徐々に追手門のプレッシャーを攻略し始める。豊富な運動量で中盤を支配し始めると、MF6朝倉を起点として、学芸らしい長短縦攻めやパスサッカーで立て続けにゴールを奪う。何としても得点の欲しい追手門は積極的に選手交代をすることで運動量の活性化を図る。しかし、学芸のリズムを止めるに至らず、試合を決定づける3点目が決まってしまう。追手門は序盤でのチャンスを生かせなかったことが悔やまれた。ゴール前におけるラストパスの質や、ハイタLERIAにおける落ち着いたプレーの差が勝敗を分けた。最後まで気持ちのこもった全力で戦い抜いた両チームの健闘を讃えたい。